

# Domnung Pii SCHEC

ドムヌン ピー シェック  
～ シェックからの便り～

第2号(2004年7月号)

NPO法人カンボジアの健康及び教育と地域を支援する会  
(SCHEC)

〒160-0004  
東京都新宿区四谷4-3-29  
伸治ビル4階  
Tel・Fax 03-5368-6387

こんにちは、NPO法人SCHECでは、毎年11月と3月にカンボジアへ赴き、歯科医による歯科診療活動や、井戸の設置状況の視察、小学校の建設事業の確認などを行っています。今回は、2004年3月期の小学校建設事業と井戸掘り事業を中心に報告いたします。

事務局

## 村に小学校ができた！ クチアイ・ハナ・サンキム小学校 開校式



トニコム郡では、まだ、多くの未就学児童があり、20校舎分が不足しているということでした。カンボジアという国の将来を考えたとき、教育は最重要課題のひとつだと思います。

本年11月には、大宮シティロータリークラブと八王子の吉田さんのご寄付により、2校舎の建設が決まっています。一方、現在、1口25,000円からの学校建設寄付金が、あと200万円あまり集まることで、1校舎分になります。多くの人たちと力を合わせることで、カンボジアの子供たちに校舎を贈りたいというご寄付者のお心のこもった資金ですので、可能な限り早く小学校建設を実現させたいと思います。ご協力をお願い申し上げます。

カンボジアの国旗を振りながら歓迎してくれる子供たち

2004年3月13日、乾季の強い日差しの中、シェムリアップ州プアー郡ササースダム地区クチアイ村にて「クチアイ・ハナ・サンキム小学校」の開校式が行われました。この校舎は、世田谷区の渋谷さんのご寄付により建設されたSCHEC学校建設事業第2校目の小学校です。校名には、ご生前ボランティア活動を熱心にされていた渋谷さんのお母様のお名前「ハナ」、そしてカンボジア語で「サンキム」(希望)という言葉が入りました。

この地域は、もともとお寺の高床式の建物の床下で230人の子供たちが勉強しており、さらに220人の待機児童がいる地区でした。このたび1棟5教室の校舎が完成したことで、2交代制ですが、ほぼ全児童が通学できるようになりました。

現在、カンボジアでは、人口の約半分が15歳以下の子供です。小学校への就学率は80%くらいといわれています。経済的理由もありますが、すべての子供達に通うには校舎等のハード面の不足も問題です。昨年SCHECが小学校を建設した、ソ-



### カンボジアの未来へ 渋谷寿代

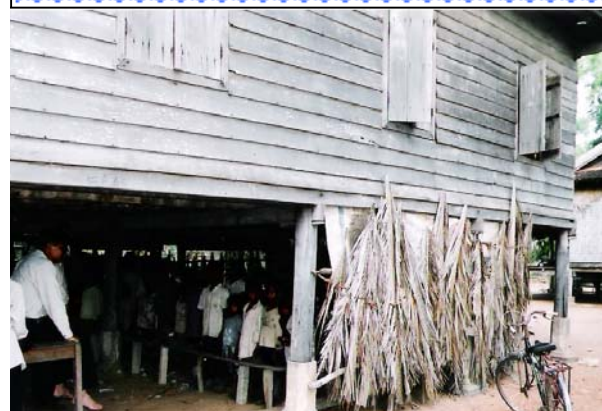
私がSCHECの存在を知ったのは朝日新聞のNPO法人がカンボジアで井戸掘りや学校建設などを行っているという記事でした。

当時、母を亡くして失意の中にあつた私は、何か母の供養になる有意義な事はないだろうかと考えていました。そこで迷わず電話をいれ、母の名前を付けて10本の井戸をお願いしました。実は、最初から小学校の建設をと思っていたのですが、こんな事を言うのは失礼なのですが、SCHECに関して新聞記事でしか情報の無い状況だったので、まず井戸をお願いしてみても結果を見て考えようと思ったのでした。やがて、詳細な報告書と共に何枚もの写真が送られてきました。そこには、出来上がった井戸を囲む地元の人々の姿がありました。本当に嬉しかったです。そのとき、学校建設をお願いしようと決めました。

開校式がどのような形で行われるかも知らずに出かけた私の目に最初に飛び込んで来たのは、カンボジアの焼け付くように暑い日差しの中、道の両側にお行儀良く並んで歓迎の為に私達を待っていた生徒の姿でし

来賓のプアー郡郡長の来賓挨拶より  
(一部抜粋)

「...式典ご出席の皆様、ササースダム地区市民代表の私達は温かく歓迎申し上げます。過去、クチアイ村では、正規の小学校は遠く、子供たちが通学するのは大変なことでした。また、経済的な面もあって、子供たちを小学校に行かせることができず、家畜の見張りをさせたり、畑や田植えの手伝いをさせたりしている家庭も少なくありませんでした。それゆえ、中学校に進学できる子供はさらに少ないのが現状です。その点からも私たちの村に完成した校舎はとても重要な教育施設です。...このご恩に深く感謝申し上げます。」



校舎完成以前は、このような高床式の僧坊の下で勉強していました。

うに暑い日差しの中、道の両側にお行儀良く並んで歓迎の為に私達を待っていた生徒の姿でした。思いもかけない光景に、私は驚き、鼻の奥がツンとして危うく泣きそうでした。会場は校舎の前に設けられ、全校生徒、父兄が集まっていました。カンボジアは仏教国。大勢の僧侶の読経で開校式が始まり、子供達の伝統芸能アプサラダンスもあり、華やかでした。

私が何よりも印象的で嬉しかったのは、教室に座って待つ小さな可愛い子供達に、学用品を手渡した時のことです。キラキラと瞳を輝かせて、はにかみながら嬉しそうに笑ってくれる姿を見て、学校が出来て本当に良かったと思いました。

カンボジアには、日本では考えられないほど貧しい子供達が沢山いますが、勉強して自分の人生を切り開いていって欲しいと心から願わずにはられません。SCHECの活動によって出来た小学校には、「サンキム」(希望)という言葉がついていますが、これからも「サンキム」の輪が広がっていくことを願っています。

# 井戸掘り報告

~ 69本の井戸を確認してきました ~

2003年11月から2004年2月までに戴いたご寄付により、69本の井戸を掘ることができ、今年3月の現地視察にて、設置状況を確認してまいりました。これにより、295世帯が新たにきれいな井戸水を使用することができるようになりました。人数にすると1500人以上になると思われます。



そのうちの12本の井戸につきましては、当会がNPO法人となつてからいただきました井戸への寄付金の為替差益を使って掘削を実現させました。それらの井戸の看板には、ご寄付者への感謝の気持ちを込めたメッセージを入れさせていただきました。これまでSCHECに井戸のご寄付をくださった多くの皆様に改めて厚く御礼申し上げます。

また、「クチャイ・ハナ・サンキム小学校」の校庭に井戸を1本掘りました。クチャイ村の付近は地形的な問題から井戸水の出にくい地域ですが、他よりも深く掘ることで、無事水ができました。校庭に井戸ができたことで、付近に住む村人達も、きれいな水が使えることに大変喜んでいそうです。

今後は、このように、水の出にくい地域

にも井戸を掘っていくことが予想されますが、それに伴い地形調査や費用調査などを行う必要が生ずると思われま

す。今年4月の懇親会や当会のホームページでご紹介しておりますように、2000年に掘った井戸のおかげで、井戸端が村の社交場となり、且つ、交易の場となり、村の生活が格段

に豊かになったという例もあります。庭先の溜池や甕にためた水で生活している人々にとっては、ポンプ井戸ができることによって、その日から生活は大きく改善されます。井戸掘削活動は、必要性の高い、且つ、継続的な支援です。今後ともご協力くださいますようお願い申し上げます。

井戸端でおしゃべりする親子



## SCHEC写真館 ~女神(デバター)たちの競演~

カンボジアの遺跡には、美しい女神たちが登場します。

左から、髪を結っているデバター(タ・ソム遺跡)、キツネ目のデバター(バンテアイ・プレイ遺跡)、優美さでは東洋一とも言われるデバター(バンテアイ・スレイ遺跡)、保存状態が残念なアヒル顔のデバター(プレループ遺跡)。



## 11月には小学校2校開校

11月には、大宮シティロータリークラブのご寄付で、バンコン郡アンピール地区バンコン村に「バンコン小学校大宮シティロータリークラブ校舎」が、八王子の吉田さんのご寄付で、チクレーン郡トロクロム地区トップシャム村に「トップシャム・サンキム小学校」が竣工し、その開校式典が行われます。

バンコン村の小学校は、SCHEC設立前の3年前に井戸視察のため訪れた際に、村の要請を受けていたものです。

トップシャム村の小学校は、シエムリアップから東へ約60km、更に脇道を6km入った村に朽廃した校舎の代わりに

建設されるものです。3月の開校式典で「りんご追分」やオリジナルソング「メコンデルタ」を唱ってくださった歌手の横山恭子さんが再び同行し、式典に歌のプレゼントをくださる予定です。

歯科医師団派遣については、鳥インフルエンザの流行により、本年3月は実施することができませんでしたが、来る11月の支援活動では、歯科医師、衛生士、一般ボランティアを合わせて20名以上を派遣する予定です。医師団はじめ他のメンバー全員張り切っております。次号では、診療活動の様子をご報告いたします。

4月25日にホテルJALシティ四谷東京にて、第2回懇談会が開催されました。正会員、特別会員、ご寄付者の方々33名が集まり、これまでの活動についての報告に対し、様々なご意見、ご感想を戴きました。会員と理事との貴重な意見交換の場ですので、今後も多くの方々のご参加をお待ちしております。

## 総会

## 懇談会

6月27日に第2回定時総会が開催されました。正会員13名(理事5名含む)の出席と22名の正会員より委任状を戴き、定足数に達しました。平成15年度の事業報告、平成16年度の予算案の議決、そして昨年11月と今年3月の支援活動の報告がなされました。会議の後の茶話会でも、活発な意見が出て大変有意義な会合となりました。

## 事務局便り

視察の合間に、カンボジアの伝統工芸品の技術学校「Les Artisans d'Angkor」(アーティザン・ダンコール)と、織物研究家の森本さんが始められたシルクの工房「クメール伝統織物研究所」(写真)を訪ねました。

そこでは、若者たちが一生懸命に作業しており、たくさんの素晴らしい製品が生み出されていました。

彼らは、自国の伝統技術を身につけることによって、自立し、又、カンボジア人としての誇りを持って生きていくことができるのではないかと感じました。[毛]

